

## 一たかが道具されど道具、いまこそ下水道の変態を！

理事長 栗原秀人

下水道は暮らしと街と水を支える道具です。地域に必要な道具がなかった時代、道具を用意することが最大の目標でした、物差しは着手・供用開始都市数と普及率で、「〇年までに下水道に着手する」「普及率が〇%まで上げる」が、国や地方の行政目標、選挙の公約にもなりました。着手市町村が増えて普及率が向上、すなわち道具が揃ってきたら、いつしか「下水道は終わった」と言われはじめ、予算も組織も削減されるようになってしまいました。



道具は所詮道具、要は道具をいかに上手に使いこなしているかが地域力、道具がもたらす効果、つまりアウトカムで評価されなければいけません。下水道が暮らしと街と水を支える道具なら、例えば「衛生的で快適な暮らし」「浸水に強い街、魅力ある街」「美味しい水、生き物のいる水」などがアウトカムです。道具を持ったなら終わりではなく、アウトカム指標から道具の使い方、将来にわたっての道具の機能や状態が評価されなければいけません。人口減少、財政難、地球環境等々下水道を取り巻く社会環境は大きく激しく変化しています。応じて暮らし、街、水の目指す目標像も変わります。

とすれば道具である下水道が造った当時のままでよいはずがないことはどなたも合点できるはずで、脱炭素、DX、広域化等々直近の課題も山積です。時代に対応できない道具は無用の長物、そうならないよう、「大改造、劇的ビフォーアフター」の匠のような改築が求められています。平成 26 年の新下水道ビジョン「循環のみち下水道の持続と進化」をとりまとめた下水道政策研究委員会では、「下水道の変態」が議論されました。木は根、幹、枝、梢そして葉から成り立ち、そ

れぞれが育ちながら大木に成長していく、普及拡大を最大の目標に掲げていた時代の下水道は木と同じ成長の仕方で良いが、周辺環境が大きく変わっている中であってそれではダメ、昆虫が幼虫から蛹、成虫へと姿形を変えていくように下水道が変態していかないとダメだとの議論でしたが、今に通じる「変態論」だと思います。たかが道具されど道具、良い道具があれば暮らしと街と水も良くなり、持続します。変態には異業種・他業種との交流も不可欠です。どう変態していくか、当水倶楽部で研究し発信していくテーマは幾つかありそうです。

## 2021 年度活動報告

### オンライン推進分科会 活動報告

OL 推進分科会事務局 齋藤 均

たより前「NL69 号」でも紹介されているが、佐藤前理事長の大きな功績に、水倶楽部の集会等の運営にオンライン「OL」システムを導入した事が挙げられる。新型コロナウイルスによる「集会の制限」から導入されたが、正会員が日本各地に分散している当倶楽部では、「良い方向」にシフトチェンジしたと思われる。

栗原新理事長の新任ご挨拶にある様に、地方在住の高橋様と、大屋様が新たに理事に就任した。理事会は東京で頻繁に開催される事から、これまで地方会員が理事に就任する事は困難であったが、その壁を取り払ったと言えよう。また、押領司理事報告の様に、今年度総会を「ハイブリッド方式」で開催する事が出来た。会場出席 7 名に対し、OL 出席が 23 名と 3 倍以上である。OL による「バーチャル」の顔合わせではあるが、昨年度の「書面評決」がメインの方式からは格段に進歩したと言える。

さて、「新型コロナウイルス感染症」であるが、新たに「インドデルタプラス型」が発現するなど、収束に向かう事があまり期待出来そうに無い。ついに開催まで 1 ヶ月を切った東京オリ・パラ大会も「無観客」開催になりそうである。欧州のサッカー世界大会の観戦等でフィンランドやイギリスの観客に、新規感染者が多数発現した事を鑑みるに、新型コロナウイルスの完

全な収束まで、しばらく時間を要するであろう。つまり従来の「会場集合型」での研究集会の開催は、当然無理と思われる。

過去2回の研究集会で分かったが、OL開催により、北海道から九州までの全国各地から参加者を集める事が出来た。「任意の場所から、ネットを通じて研究集会に参加出来る」事が、集会参加のハードルを下げたと言えよう。一度傾いた流れはなかなか元に戻らない。今後の研究集会は、先の総会と同様に「ハイブリッド型」に移行してゆくと思われる。

ここで、問題となるのは、水倶楽部会員内で、OLシステムを使える人と使えない人との差が広がる事である。OLシステムで使用するアプリ：Zoomの操作では、参加者は接続後の操作はあまり無い。ただ、Word等の様に「一人で操作練習」と行かないのが難点である。OL推進分科会では、希望者に対し接続練習を随時行って行く予定である。ただ、誰が困っているのか現状を把握出来ていないので、接続練習希望者は分科会(齋藤均)まで、連絡して頂ければ幸いです。

## 新役員自己紹介

### 大屋弘一理事

この度、21世紀水倶楽部の理事という大役を仰せつかり、身の引き締まる思いがしております。大阪府庁を退職して早8年が過ぎましたが、大先輩の皆様方、皆、現職時代ご活躍されたのはもちろん、退職後もそれぞれの場で、そして水倶楽部でご活躍されているのを見て、大変敬服するとともに、この私で職責を全うできるのか自問しているところです。



初めての方もおられますので、簡単に自己紹介させていただきます。大阪府庁で下水道関連の業務に32年、その間下水道事業団に2回通算4年、下水道協会に2年出向したご縁で、水倶楽部会員の多くの方にもお世話になりました。大阪生まれの大阪育ちですが、計5年間の東京暮らし、内2年は単身赴任という、普通の地方公務員ではできない経験をさせていただき、お陰様で、私自身「完璧な標準語」をマスターしたつもりやったんやけど、故石川忠男さんに「コテコテの大阪弁」と評され、それ以降、東京に行っても「標準語訛りの大阪弁」を臆せず使うことに決めてまんねん。

東京一極集中の弊害が囁かれる中で、コロナの影響でリモートワークやweb会議が一気に定着し、地方のステータスが今後

上がっていくような気がします。是非21世紀水倶楽部の中でも「地方の姿」「地方の声」を発信していければ、と考えています。また一方でコロナによる悪影響として、外出や会合の制限・自粛が求められ、その結果NPO活動を始め様々な活動が影響を受けていますが、これを好機ととらえ、新たな展開を模索できればと思っています。

大学時代に「活性汚泥」を卒論のネタにして始まった「下水道人生」を、21世紀水倶楽部でもう少し延長し、また「水」に広げていく、そういう機会を与えていただいたことに感謝しています。どうぞよろしく願いいたします。

## 会員だより

### 柏谷先生記念講演奮戦記

OL推進分科会 齋藤 均

水倶楽部でオンライン「OL」システムを導入し、研究集会などを行おう！と押領司事務局長主導で動き出し、先日の令和3年度総会でまる1年であった。齋藤は「えっ？Zoomですか？使った事がありますよ。」と一言こぼしたのが運の尽き？「OL推進分科会事務局」となった。その1年間の集大成が「柏谷衛先生記念講演」である。記念講演をOLで行う事は初であったし、それ以前に、総会自体を「ハイブリッド型」で行う事も初であった。「OL担当」として、少々「胃が痛い」思いをしたのは事実である。

さて、柏谷先生の記念講演である。先生は「水倶楽部でZoomを使おう」と決まってから、積極的に練習会に参加して頂き、新年会や懇親会、またOL研究集会@2回にもご参加頂いた。日常でもZoom開催の講習会に参加、遠方在住のご家族ともZoomにて対話されており、先生ご自身のZoomの使用に問題は無かった。そこで最初は、柏谷先生に依頼し「Zoomで記念講演をして頂こう」と言う話だったのだが、

1. 先生のお顔ばかり画面に映しても視聴者がつまらないだろう「先生に失礼な！」。
2. Zoomの中で、先生がパネルを持って話している画像を映そう。
3. パワポを使い、先生が講演している様子をホテルの一室で録画して放映しよう。
4. どうせなら、全てオンラインでやってしまえ。

と見る見るうちに話が発展してしまった。どうなる事かと案じたが、結果は視聴者が見ての通りである。

具体的には、柏谷先生に書いて頂いた原稿を元にシナリオを作り、先生の話に合わせて、齋藤がZoom画面にパワポを映し



出す。その状況を録画し、本番では「録画データ」を齋藤が Zoom の画面共有で流す、と言う作戦を採った。

放映された画像を、さらに別途録画して確認したが、合格点が貰えるかな？視聴された方から特に不満が出なかったと言う事で満足している。「案ずるより生むが易し」だ。もちろん、最初にしっかりと原稿を書いて頂き、「時間通り」に講演された柏谷先生だけではなく、パワポ資料作成にご尽力頂いた、佐藤前理事長のご協力があったこそ、である。

この「録画データ」、柏谷先生、佐藤様、齋藤の3者で主に作成したが、1度も直接会わず、ほとんどメールのやり取りだけで行った。技術の進歩に驚くばかりである。最後に、本録画データが水倶楽部 HP に掲載されたら良いなあと思う次第である。

## 編集幹事のあと整理

- 今号は前号での取りこぼしを拾った形になりました。理事長の巻頭続編、大屋理事の自己紹介文がそれらです。
- オンライン推進分科会の齋藤均会員からは二編。奮戦記のほうは会の活動に際しての「裏話」的な内容もあったので、会員だよりへの掲載にしました。
- 会員だよりコーナーへの投稿を募集しています。ステイホームなので多くの投稿を期待しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月